

# 毒草

— 夏の旅

清水鱗造



毒草

— 夏の旅

清水鱗造

\*

港では細い魚を釣った  
僕たちは子供と短パンで歩き回った  
あの植物を探しに  
蛍の繁殖する小川を渡った  
籠に入れた魚たちはみんな剃刀になっていて  
指先やこめかみを傷めた  
墓や死んだ貝のいる浜  
浜おもとの点々と生えるその浜の  
藤壺で僕は足を深く切った  
弓状にしなる釣竿  
ほとんど頭だけの  
ぶよぶよの

海底に棲息する魚は

海の尻から下痢のように浜に上がってきた

僕らは海亀の夢をもう漏らさない

夢は浜の花火にみんなまぎれてしまった

僕らの不安の盃に盛られる魚醬は

しつこい味がする

海亀のはるかに広がった夢

有機体の紐や藻の雲に覆われた夢

僕らはそれを刈る

刈る

ただ一刻の夏の温度のために

刈る

そのようにしてバス発着所の惨劇は終わった

\*

悪が高原の花鳥に結びつくことは  
よくある

徹底的な歯車のずれを  
焼けるのもかまわずに  
ぐるぐる回すことは  
瘴気を発散させるが

もう観念だけのことでないことは  
ありありとわかる  
悪は一挙に花鳥に堕ちる  
それはしおれた毒草の  
貧弱な群落だった  
一掬の苦い粉末だった  
妖精の森は消えろ

\*

ガラス細工を僕らは見てまわる  
深い湖に晒されて

僕らの髪の毛は黄色に逆立っていた

湖畔の喫茶店の窓から

もう一人の僕が歩いているのを

確かに見た

そして

僕らは毒草だけを集めた植物園に入る  
マグロを吊り下げて

腐ったにおいでいっぱい  
の温室に入る

毒を持つ菌が日に干からび  
ている

展翅板に僕は一枚の光を留  
める

それは平面をじわじわと広  
がり

湿気は硫酸のように僕の頬  
を侵そうとした

アルカロイドの強い波が植  
物から出て

肌が揺れている

僕はピストルをゆっくりと  
胸ポケットから出し

人間の頭に似た毒の果実を  
撃った

それは軟体動物の破れるよ  
うなしぶきをあげて

温室のガラスに幾重にも筋  
をつけた



\*

燭を灯す

蛾は火に飛び込んでただれて落ちる

焼けた蛾を皿に盛り

フォークを動かす

その食事は複雑な計算をくぐり抜けている

鱗粉は塩あじ

そこに大ウナギの輪切りがワゴンで持ち込まれる

浮世絵の細長い女の顔と

病者の群像

そして昆虫の変態

プログラムは聖なる複雑さで

そこここに

火を灯す

フォークの金属の響きが

山を変幻させる核の現象になるとは

気がつかない

食堂は高速度で過疎地帯に向かっていているのだ

\*

馬の肋骨が

横に伸びている

馬の胴体をトンネルのようにして

列車が尻から頭のほうに

走っている

陳列棚に朝日が照らし

時計が蒸発していた

その時計を吊るす銀の鎖が

部屋の隅で光り

馬の首はゆっくと

そちらに動く

胴体では高速で列車が走っている

両側の耳のそばでは

水時計の血管が青く

足に向かって下り

やがて床にまで

毛細血管が

広がっていった

\*

壊れるボーダーラインで

少年は体に穴を開けるのに夢中だ

耳たぶや乳首

鼻翼に金色の粒をつけるために

重金属の音楽が鳴っている

少年の季節で

いっさいの傷がさなぎ化する時がくる

唐突に彼は職探しを始める

貨幣を貯めて旅するため

夜の集積を綴じる

やがて彼は港町の

古本屋の片隅で老いている

人体像のコレクションを

売りつづけるうちに

透明な画像の粉末が

毎朝彼の掌で一粒ずつ気化し

丸い眼鏡をかけて半ズボンをはいた採集者が

捕虫網で

ススツと追いかけている

それを捕えようとしている

\*

イカは知っている

そのときイカはこちらを見ていた

瞬きのすきに

動物はいなくなつた

あの夏の浜は斜めに傾いでいた

重く茂る桜の木は  
もうもうとした熱い霧を  
浴びている  
ソファベッドが  
音速で岬を迂回し  
弧を描くのが  
イカの網膜に  
青く滲む



\*初出 「出来事」三 一九九四年四月

毒草 — 夏の旅

著者 清水鱗造 ©1995 RINZO SHIMIZU

発行日 一九九五年八月三十一日

発行所 味爽社

DTP製版 味爽社  
印刷 信毎書籍印刷  
製本 ミスズ製本

この小詩集は、一九九四年に書いたものを  
一九九五年に小冊子にしたものである。

ふと思いつて電子版にしてみることにした。  
表紙絵は星野勝成が描いてくださった。

二〇一二年九月二三日